少年と獅子

boy and lion

少年と獅子

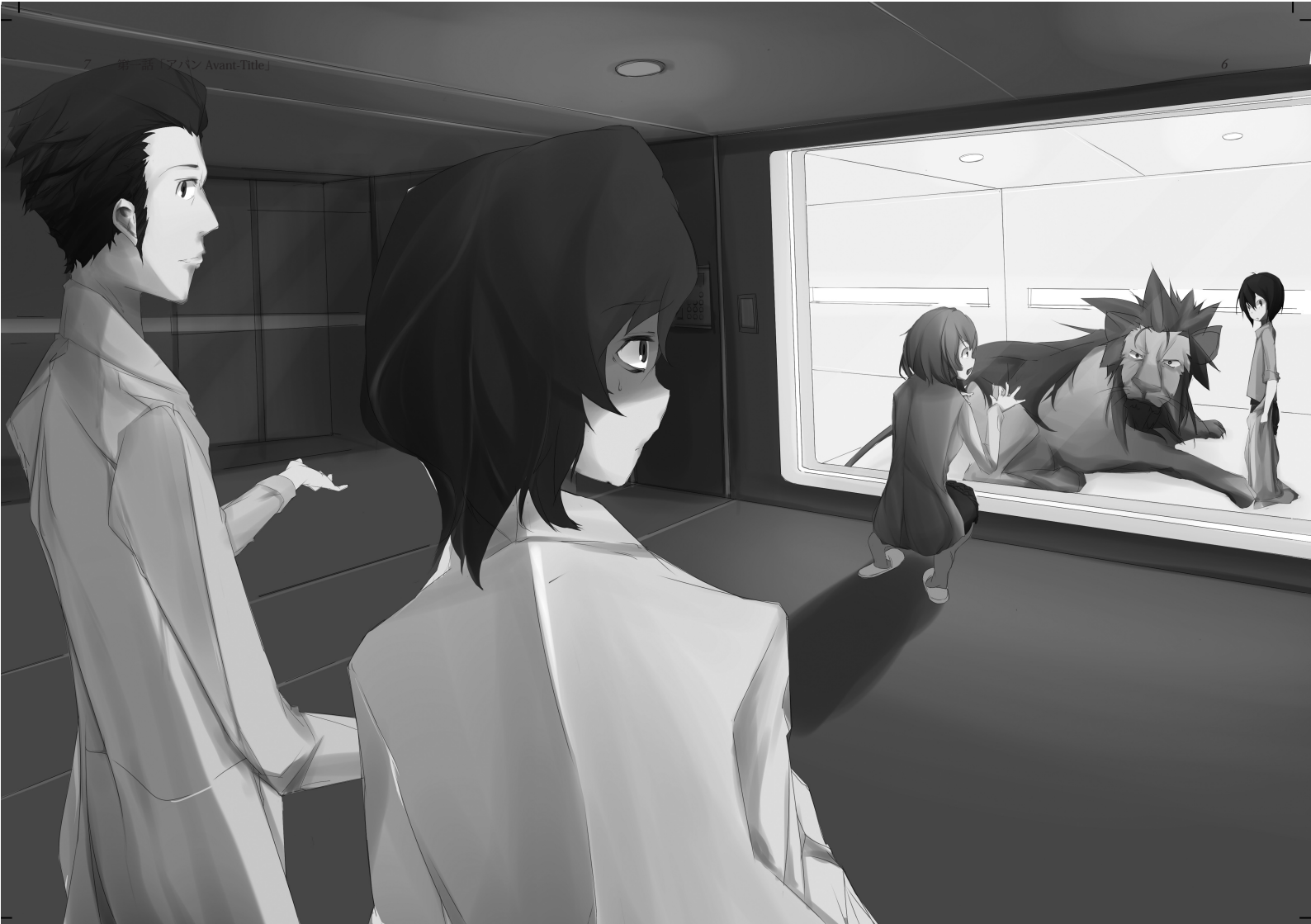
boy and lion

少年と獅子

— Boy And Lion —

DrawingWriting

原作：カント　イラスト：水上 二十歳



contents

1. 「アバン」 Avant-Title
2. 「研究所の朝」 The Laboratory In the Morning
3. 「日常の終わり」 The End Of Daily Life
4. 「宣告」 Sentence
5. 「アカシック・レコード」 Akashic Records
6. 「絶対」 Absolute
7. 「スセリー」 Suthery
8. 「悪魔」 Devil
9. 「策」 A Plan
10. 「選別」 Selection
11. 「ピュラ」 Pyrrha
12. 「常世根」 Tokoyone
13. 「世界」 The world
14. 「アアル」 Aaru
15. 「神」 God
16. 「プロローグ」 Prologue

第一話「アバン Avant-Title」

夜の深さが未だ抜けきっていないかのように、並木道は静まり返っていた。

真っ直ぐな石畳の両脇では、いずれ降り注いでくるであろう陽の光を待ちわびるかのように、ヨーロッパカエデ達が一斉に空を見上げている。だが、木々の期待を一心に集めるその天は、灰色の重たい雲を抱え込み、青をすっぽりと覆い隠してしまっていた。

「今日は晴れなさそうね」

石畳を行く女性が、ぽつりと呟く。白い半袖のシャツに、足首の見えるタイトパンツ、そして黒い革のヒールサンダル。肩に小奇麗な黒のショルダーバッグを掛け、一歩一歩、落ち着いた歩調で、幅の広い石畳を進んでいく。

「でも、雨も降らないよ」

女性の隣を連れ立って歩く少年が、抑揚無く言葉を返した。彼もまた、足音らしい足音もなく、静寂の並木道を歩んでいる。

年は、およそ十といったところだろう。ブラウンのブーツに麻色の半ズボン。紫の上衣は前のボタンが全て開いており、その中に真っ白なシャツを着ている。長い前髪の隙間から覗く二つの瞳は、川底の濡れた小石のように真っ黒だ。そしてその色は、彼と、傍らの女性とに共通した髪の色でもある。

手を繋いで歩く彼らの遠く背後で、車の音がした。

静寂を振り払う程でもなく、しかし無音という程でもなく。モーター音は遠いどこかを、遠慮がちに駆け抜けていく。それはやがて少しだけ高くなって、そしてまた、風の無い並木道から消えていった。

「今日はまだよね?」

人工的な音が消えるのを待っていたかのように、女性は言った。片手を上衣のポケットに突っ込んで、少年は「うん」と答える。

「今日はライオンが来るだけ」

そう、と返事をしてから、女性はチラリと、少年を見た。

彼女の胸の高さにある少年の瞳は、揺らぐことなく、道の終わりを見据えている。女性と歩幅を合わそうとしているのか、やけに大股に歩く少年をしばし見つめてから、彼女はまた、視線を前方へ向けた。

「寒くない?」

肌寒さに、彼女は問い掛ける。日中は三十℃近くまで上がるとはいえ、朝晩は冷え込む。曇り空なら尚更だ。

「大丈夫だよ」

少年の答えに、女性はまた、そう、とだけ返した。

返した直後、不意に、彼らの鼻を、新緑の香りがくすぐった。

女性が、空を見上げる。

空を受け止めようとするかのように、大袈裟なまでに大きく広げられた木々の枝葉。その隙間を縫って見える曇天。そこに一瞬、青空が見えた。

「じゃあ、ママ」

傍らからの言葉に、女性は視線を戻す。

豊かな緑が作り出すアーチが、敷き詰められた石畳が、十数メートル先で途切れていた。その先には、灰色のアスファルト。複数人が並んで歩ける幅の広い道と、更にその向こうに走る二車線道路が、一歩ごとに近づいてくる。

「怪我したりはしないのよね?」

「うん」

「すぐに会うことになる?」

「すぐだよ」

「そう。なら、またね」

石畳からアスファルトへと地面が変わったところで、女性は腰を落として少年に言った。少年は頷き、繋いでいた手を放す。

またね、と、まだキーの高い少年の声が、女性の耳に届いた。やがて声の主は左に折れ、等間隔に電燈とダストボックスが並ぶ道を、道路に沿うように歩いていく。

その小さな背中に揺れるバッグをしばらく見つめて、やがてそれが更に小さくなってから、女性はくるりと回れ右をした。ショルダーバッグを右手で固定し、少年と同じく道路に沿うように——しかし、彼とは真逆の方向へと——歩いていく。

まだ残る彼の温もりを、その掌に感じながら。